The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日英語の頭部の理解をめぐって : 理性・知性の座としての「頭」とhead
Author(s)	後藤, 秀貴
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 29-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69959
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日英語の頭部の理解をめぐって ―理性・知性の座としての「頭」と head―*

後藤　秀貴

1　はじめに

身体部位詞 (body-part terms) が、言語問わずヒトの精神作用（感情・思考・判断・意志などの精神活動、およびそれを司るもとになる性格・気質・度量などの人格的特徴）に関わる意味を有することは、関連する膨大な数の辞書・研究から推測するにほぼ間違いない。身体部位詞の比喩的用法は、ヒトが身体という実体を通じて精神を理解することを最も端的に示す言語的証拠として、「身体性 (embodiment)」を強調する認知言語学者らの注目を浴びてきた。一方、Sharifian *et al.* (2008) は、身体と精神との結びつきにおける身体性を認めながらも、言語間の相違性については普遍的な身体性のみでは説明がつかないとし、言語特有の理解を生む社会・文化的な要因の重要性を強調している。

筆者は後藤 (2018) において、腹部・胸部に関する日英語の比喩表現を、身体経験、社会・文化経験という二方向の視点から分析することで、両言語に見られる類似性・相違性に対する説明を与えた。Sharifian *et al.* (2008) は、通言語的な観点から、精神の座が腹部・胸部・頭部という身体の中心軸に位置する部位のいずれか（あるいは複数）に置かれる傾向を指摘している。本稿は、これらの 3 大部位のうち、残る頭部と精神作用の結びつきを扱うものである。具体的な論点として、以下 3 つを挙げる。

I.　「頭」と head は、いずれも理性・知性と結びつく傾向にある。
II.　表現の成り立ちをみた場合、「頭」と head の類似性の要因を必ずしも身体経験に求めることはできない。
III.　理性・知性の座としての「頭」と head の理解は、メタファーによる構造化によって成り立っており、それらメタファーの構造には日英語間で相違性もみられる。

本稿では頭部を指す代表語「頭（あたま）」、head に加え、脳髄を指す語「脳」、brain を分析対象とする[1]。以後、「頭（脳）」あるいは head (brain) を含み、何らかの精神作用を表す比喩表現を、「頭部の表現」とし、日本語・英語それぞれについて述べる場合、「「頭（脳）」表現」、「head (brain) 表現」と呼ぶ。また、本稿では、概念メタファー理論 (e.g. Lakoff and Johnson 1980, 1999) の慣習に倣い、ある語句が概念を指すことを強調する場合や、概念メタファーを示す際、山括弧（＜＞）を用いる。

論文の構成は次の通りである。まず、第 2 節において、日本語・英語各々に対する先行研究を参考に、「頭（脳）」、head (brain) と結びつく精神作用の類似性を示す。第 3 節では、「頭（脳）」表現、head (brain) 表現を成立基盤の観点から分析することで、頭部に関しては生理的な感覚・反応との共起関係に基づく表現が限られており、その多くが概念レベルでのメタファー的認知操作を経たものであることを論じる。第 4 節では、理性・知性を表す「頭（脳）」表現、head (brain) 表現の構造を観察することで、日英語における類似点・相違点を示す。第 5 節では、まとめとともに今後の展望を示す。

2　頭部と結びつく精神作用

日英語における「頭」と head の比喩的な理解については、これまでに認知言語学的な観点から様々に分析されている。しかし、対照言語学的なアプローチに限定した場合、その研究例は少なく、精神的な意味

* 本稿を執筆するにあたり、同大学院の友繁有輝氏から有益なご意見を頂いた。感謝申し上げる。

[1] ただし、「頭」と head については、日英語で必ずしもその指示対象が一致するという訳ではない。宮地 (1973) は、現代日本語において、頭部を指す代表語は「頭（あたま）」であるとした上で、その使用に応じて指示範囲が変化しうることを指摘している。「頭」が胴体や四肢との対比で用いられる場合、[1] 首から上全ての部位（e.g.「頭を出す」）あるいは [2] 首を除いた頭部（e.g.「頭が大きい」）を指し、さらに、顔面との対比で用いられた場合、[3] 頭髪（e.g.「頭を刈る」）を指す。一方、英語の head も首から上の部位全てを指示対象とするが、日本語の「頭」とは異なり、顔面 (face) の意味として用いられる場合（安藤 1986）や、目・鼻・口などが顔を介さず、直属する部位としての認識（e.g. one's eyes nearly pop out of one's head:小林 2008）が存在する。

に関してはいずれも「頭」と head の意味拡張の一例として言及されているに過ぎない（e.g. 姫田 2003; 皆島 2006）。そこで本節では、「頭（脳）」、head (brain) と結びつく精神作用を改めて比較していく。

田中 (2003) は、日本語の「頭」を含む慣用表現が表す精神作用を [1] 感情（e.g.「頭に来る」）、[2] 感情を伴う思考（e.g.「頭を痛める」）、[3] 思考（e.g.「頭を使う」、「頭を絞る」）へと大分した上で、もっぱら [3] に該当する表現が多いことを指摘している。また、有薗 (2009: 213) は、「心配事で頭が一杯になる」のような表現が少なからず情緒的精神（本稿でいうところの感情）を表すという事実について、「そのような場合にも、その産物は思考の結果生ずる感情であって、対象との知覚的接触によって即座に引き起こされる情動とは異なる」と述べ、「胸」によって表される悲しみのような（e.g.「胸が｛張り裂ける／潰れる｝」）元来情緒的側面を備えた精神とは区別されるべきであると主張している。一方、英語の head については Niemeier (2008) による分析が詳しい。Niemeier は、西洋文化圏に根付いたデカルト的二元論思想に基づき、理性的判断の座としての head、感情の座としての heart (“the head as the centre of rational judgment and the heart as the centre of emotions” p. 365) という、相対する文化モデルを提案している。

上記の先行研究から導き出されるのは、日英語の「頭」と head がいずれも非感情的な精神を司る部位として理解されているということある。ただし、ここでいう「非感情的な精神」とは、先行研究の説明を包括して捉えた場合の最も一般的な定義であり、より具体的なレベルにおいてどのような精神作用が頭部と結びつくかについては明らかではない。そこで、「頭（脳）」表現と head (brain) 表現をその意味に応じて細分化すると、以下の (1-10) のようになる（田中 2003; 有薗 2007 の分類を一部改変）[2]。

(1) ＜怒り＞
頭が熱く燃える、頭から湯気を立てる、頭に｛来る／血がのぼる｝

(2) ＜熱意＞
with a full head of steam

(3) ＜自惚れ＞
go to one’s head / have a {big / swelled} head

(4) ＜心配・憂鬱＞
a. 頭が｛痛い／一杯になる／重い｝、頭を｛痛める／砕く／悩ます｝
b. {bother / rack / trouble / worry} one’s head / have something hanging over one’s head / headache

(5) ＜理性＞
a. 頭が｛おかしい／変になる｝、頭を冷やす
b. a cool head / {go off / keep / lose} one’s head / make someone’s head {spin / go round} /{not right / wrong} in the head / out of head

(6) ＜思考活動＞
a. 頭が｛働く／回る｝、頭の中が真っ白になる、頭を｛絞る／使う／働かす｝、脳みそを絞る
b. beat one’s brain (out) / use one’s {brain / head}

(7) ＜発想＞
a.. 頭に｛浮かぶ／閃く｝、頭を過る、脳裏に閃く
b. {come / pop} into one’s head / (never) enter one’s head

(8) ＜思考力＞
a. 頭が｛いい／遅れる／空っぽ／切れる／鋭い／足りない／弱い／悪い｝、頭の回転（が早い）、脳がない
b. brainless / empty-headed / have a {good / bad} head / have a good brain / have a head on one’s shoulders / have no brain / have one’s head screwed on the right way / headless / soft-headed / weak in the head

(9) ＜思考様式＞
a. 頭でっかち、頭が｛かたい／やわらかい｝、頭を｛切り替える／ほぐす｝
b. hard-headed

(10) ＜記憶・理解＞
a. 頭に｛ある／入れる／置く／付く／残る｝、脳裏に焼き付く

---

[2] 表現出典元：『からだことば辞典』、『新選国語辞典（第 8 版ワイド版）』、『大辞林（第 3 版）』、『日本国語大辞典（第 2 版）』、『日本語大辞典（初版）』、『英和イディオム完全対訳辞典』、『新和英大辞典（電子増補版）』、『トーキング・ボディー英語からだ表現辞典－』、*Oxford Advanced Learner’s Dictionary of Current English* (7th ed.)

b. {above / over} one's head / {beat / get / knock} something into one's head / clear one's head / {get / put} something out of one's head / have something hanging over one's head / keep something in the back of one's head / stuff someone's head with something / take it into one's head

(1-4) はその程度に関わらず何らかの感情を表す表現である。(1) のように「頭」に怒りが結びつくことは、日本語の特徴としてこれまでに繰り返し論じられているが (e.g. Matsuki 1995; Kövecses 2000, 2005)、一方の英語では、代わりに熱意 (2) や自惚れ (3) が head と結び付けられている。ただし、これらはいずれも理性の座である頭部の特徴と関連づけることができ、例えば「頭にくる」、go to one's head は、本来、平静の状態を保っているはずの頭部が感情に侵食されることで、理性による適切な判断が妨げられることを含意している (cf. (5))[3]。また、こうした感情と理性の両極性は、(1, 2) の「頭が熱く燃える」、「頭から湯気を立てる」、with a full head of steam や、(5) の「頭を冷やす」、a cool head が示す「熱」と「冷」の対比からも伺うことができよう。一方、思考の座としての頭部の特徴と関連づけて捉えられるのが、(4) の表現である。有薗 (2009) でも述べられているように、(4) の表すような心配・憂鬱は、過度に思い悩むという行為が先行することを前提としており、その背景には (6) の表すような思考活動の座としての頭部の働きがある。

さて、(5-10) は、先ほどの「非感情的な精神」という定義に該当する表現を細分化したものである。すなわち、頭部と結びつく「非感情的な精神」は「理性 (reason)」(5)、「思考 (thinking / thought)」(6-9)、「記憶・理解 (memory / understanding)」(10) へと分けることができ、このうち、後者 2 つは主に「知性 (intellect)」が担う精神作用としてまとめられる[4]。ここでは、日本語と英語が (5-10) 全てで該当表現を有することに注目されたい。なお、のちに詳しく取り挙げるが、その表現の幅としては必ずしも一致が見られるわけではなく、例えば (5) のように、理性に関する事柄を英語では head の保持 (keep) や喪失 (lose)、乖離 (go off / out of) によって表す一方で、日本語では相当する表現がみられない。対する日本語では、思考活動の座としての「頭」を、機械のような道具として捉えたと考えられる表現が存在することなど（e.g.「回転（が早い）」、「切り替える」）、頭部における非感情的な精神をどのように表すかについては、日英語で相違する点もみられる。

3 胸部表現との比較から見た頭部表現の成り立ち

前節では、日本語の「頭（脳）」と英語の head (brain) に結びつく精神作用を細分化して比較することで、両者の類似性を確認した。さて、頭部と非感情的な精神との対応はどのような要因によって動機付けられているのであろうか。比喩表現の成立基盤に対する Kövecses (2005) の仮説によれば、人類共通の身体に関わる経験は、言語間で類似する比喩表現を動機づける傾向にあり、一方、各言語に根付いた社会・文化的な慣習・規範・想定は、言語特有の比喩表現を動機付ける傾向にある。後藤 (2018) では、この Kövecses の仮説に従い、胸部に関する日英語の表現の多くが共通の身体経験に動機付けられていることを明らかにした。では、日英語の頭部の比喩的理解に関しても、前節でみたような類似性を導く何らかの身体経験が存在するといえるのだろうか。

そもそも頭部は、鼓動・閉塞感など、感覚としての身体経験が豊富な胸部と比べると、日常の中で意識されにくい部位である[5]。また、頭部と結びつく理性・知性に関する精神作用自体が、感情のようにヒトの身体に何らかの顕著な変化をもたらしうるものではない。このことは、胸部と頭部の比喩表現の成り立ち

---

[3] なお go to one's head は、比喩的用法のみならず、「酒のアルコールが頭まで達し、正常な判断ができなくなる」という意味としても用いられるようである。日本語の「頭に来る」も酔いを指して用いられることがある。

[4] 「理性」と「知性」はいずれも「物事を論理的に考え、判断する能力」のことをいうが、本稿では、特に「感情に左右されず、道理に基づいて考え、判断する能力」を指して「理性」と呼ぶ（『使い方の分かる類語例解辞典』に基づく）。なお、「理性（りせい）」という日本語は明治時代に西周が reason の訳語として用いたものであることは周知の通りだが、仏教用語としての「理性（りしょう）」は、「一切存在の本性、真如、法性」のことを指す（『広辞苑（第 6 版）』）。

[5] 松井 (2007: 43) は、「事故などで頭部を損傷すると精神的な機能が影響を受けるというような経験が、頭を知性の容器と見なすメタファーの経験的基盤となっていると思われる」と述べ、知性と頭部の結びつきを身体的な要因に求めようとしているが、歴史的にみた場合、こうした経験が果たしてどの程度共起性として認められ、慣用表現の成立を促したのかについては定かではない。現代のような発達した医療が存在し得なかった時代において、頭部に損傷を受けたのちに精神的な機能が損なわれながらも生き長らえるという状況は、一般民衆の間では極めて稀であったと考えられ、少なくとも「胸が高鳴る」のように頻繁に経験する生理現象と比べると、共起性としての説明力は劣る。

を比較することでより明確となる。後藤 (2018) は、楠見・米田 (2007) によって提案された「感情言語の階層モデル」を参考に、胸部を指す語を含む日英語の比喩表現をその動機付けの観点から分類することで、胸部と精神を結びつける身体経験の重要性を主張している。後藤によれば、精神作用の座としての胸部の理解は、以下の 3 つの表象レベルの形成段階によって捉えることができる。

＜感情＞—＜感覚・運動＞→	＜感情＞—＜事象＞
時間的・空間的隣接性 →	誇張
感覚・運動レベル	
→ ＜容器＞のスキーマ →	＜精神は胸の中の物質＞
＜具象物＞のスキーマ→	＜精神は胸＞
→ 抽象化 →	スクリプトの統合、類推
→ **スキーマ・レベル** →	**概念レベル**

図 1. 感覚レベルから運動レベルへ（後藤 2018: 25 より）

「感覚・運動レベル」は、感情に伴う自律的な感覚・運動を通じて感情経験を理解するメトニミーが働くレベルで、例えば「胸が高鳴る」（鼓動）の表現が該当する。さらに、動悸の経験は、それが誇張によって別の事象へと喩えられることで、「胸が踊る」や「胸が弾む」のようなメタファー表現へと変化する。表 1 に示す通り、胸部にはこの他にも痛覚、不快感、閉塞感、熱などの豊富な身体感覚が対応付けられるが、このように、感情を経験するにつけて繰り返される胸部の身体経験は、そこが精神作用の座であるというより抽象化•一般化された認識を生む強力な基盤として機能すると考えられる（スキーマレベル）。さらに、精神作用の座としての胸部は、＜容器＞のスキーマ (CONTAINER (image-)schema: Johnson 1987) を通じて＜内容物＞としての精神を収める部位として理解されることで、我々が＜容器＞と＜内容物＞の関係について持つ知識構造を、＜胸＞と＜精神＞の関係へ対応づけることを可能にする（概念レベル）。概念レベルの表現が感覚・運動レベルの表現と大きく異なるのは、特定場面でのメトニミー基盤を含意しないという点である。例えば、「胸に収める」、「胸が一杯になる」、「胸が膨らむ」という一連の表現は、＜容器の中に対象を収める＞、＜内容物が容器を満たす＞、＜容器が内容物で満たされることで膨張する＞といった起点領域側の構造を目標領域に対応づけることで実現する。これらの表現では、上記の「胸が高鳴る」のように、ある特定の共起経験（希望や期待等の高揚によって鼓動が速まるという経験）が具体的に想起されるわけではない[6]。このほかに、胸部が内容物を前提としない＜具象物＞のスキーマ (cf. Ontological Metaphor: Lakoff and Johnson 1980) と結びつく場合も、＜固い・柔らかい＞などの我々が物体に対して持つ知識が、精神作用（＜慈悲心＞）と構造的に対応づけられることで、規則的な意味が実現する (e.g. harden one's heart / soft heart)。

表 1 は、胸部の表現に対する後藤 (2018) の分類を (1-10) の頭部の表現にも適用したものである。表が示す通り、頭部にも感情表現に限り痛覚・倦怠感・熱・血流・眩暈といった身体経験を見いだすことができるが、その適用範囲は胸部よりも狭く、身体経験を誇張したと考えられるメタファー表現も少ない。一方、理性・知性に関する表現を見ると、何らかの身体経験を想起させるものは見出し難く、＜容器＞のスキーマに基づくメタファー表現、あるいは内容物を前提としない＜具象物＞のスキーマに基づくメタファ

[6] なお紙面の都合上、後藤 (2018) では考察を加えることができなかったが、概念レベルの表現が身体経験と無縁であるという訳ではない。例えば、「胸が一杯になる」という感情表現は、様々に挙げられる胸部の身体経験のうち、とりわけ「胸が痞える」などの表現を動機づける閉塞感との強い関連性が考えられる。ただし、「一杯」という語から明らかなように、この表現では胸の中にある感情の存在を前提としており、その意味において、胸を感情を収める容器とみなす概念メタファーの存在を認める必要がある。一方、「胸が痞える」についても、その痞えこそが感情であるという説明もできなくはないが、「悲しみや心配事などのために、胸がしめつけられるように苦しくなる。」（『日本国語大辞典（第 2 版）』、下線は筆者）とあるように、「痞え」の使用を第一に動機づけるのは「苦しい」という感覚そのものであると考える。ただし、いずれも明確な区分を与えるのが難しいのは確かであり、今後これらの分類基準を明確にしていく必要がある。なお、今回の頭部の表現のうち、「頭から湯気を立てる」、with a full head of steam については、「湯気」、steam（蒸気）、full（一杯）という語に基づき、内容物としての怒りや熱意を前提としているという判断から＜容器＞のスキーマに基づくメタファー表現としても分類した。

ー表現のいずれかに分類される。

表 1. 表象レベルに基づく胸部と頭部の比喩表現の分類

	胸部	頭部
メトニミー表現	＜痛覚＞ 胸を痛める one's heart aches / heartache ＜鼓動＞ 胸が｛高鳴る／轟く／ときめく｝、heartthrob / one's heart beats fast ＜不快感・閉塞感＞ 胸が｛苦しい／悪い｝、feel sick at heart / feel the pressure in one's heart ＜熱＞ 胸が熱くなる、胸を冷やす	＜痛覚＞ 頭が痛い、頭を痛める headache ＜倦怠感＞ 頭が重い ＜熱＞ 頭を冷やす、a cool head ＜血流＞ 頭に血がのぼる
メトニミー基盤を持つメタファー表現（誇張）	＜鼓動・痛覚＞→＜攻撃＞ 胸を｛打つ／抉る／刺す／突く｝、break one's heart / heartbroken / pierce one's heart ＜鼓動＞→＜動揺＞ 胸が｛踊る／弾む／騒ぐ｝、one's heart {flutters / leaps} ＜閉塞感＞→＜閉塞・圧迫・破裂＞ 胸が｛痞える／詰まる／潰れる／塞がる｝、胸拉ぐ、胸を締め付けられる、胸が｛張り裂ける／引き裂ける｝、squeeze someone's chest / wring someone's heart / heartrending / one's heart (almost) bursts ＜熱＞→＜燃焼＞ 胸を焦がす、heartburning	＜痛覚＞→＜攻撃＞ 頭を砕く ＜熱＞→＜燃焼・沸騰＞ 頭が熱く燃える、頭から湯気を立てる、with a full head of steam ＜眩暈＞→＜回転＞ make someone's head {spin / go round}
＜容器＞スキーマに基づくメタファー表現	胸が｛一杯になる／狭い／膨らむ｝、胸に｛一物／収める／落ちる｝、胸のうちを明かす、胸を割る、fill one's heart with something / get something off one's chest / {have / keep} something in one's {chest / heart} / make a clean breast of something / one's {bosom / heart} swells / open one's heart	頭が｛一杯になる／空っぽ｝、頭から湯気を立てる、頭でっかち、頭に｛ある／入れる／浮かぶ／置く／来る／付く／残る／閃く｝、頭の中が真っ白になる、頭を｛過る／絞る｝、脳みそを絞る、脳裏に｛閃く／焼き付く｝、{beat / get / knock} something into one's head / clear one's head / {come / pop} into one's head / empty-headed / {get / put} something out of one's head / go to one's head / have a {big / swelled} head / have something hanging over one's head / keep something in the back of one's head / (never) enter one's head / {not right / weak / wrong} in the head / stuff someone's head with something / take it into one's head / with a full head of steam
＜具象物＞スキーマに基づくメタファー表現	harden one's heart / heart of {iron / marble / stone} / {soft / tender} heart / Have a heart. / a {big / great} heart / warm-hearted / cold-hearted / black-hearted、(cf. 心暖かい、心ある、心が｛かたい／冷たい／濁る｝)	頭が｛いい／おかしい／遅れる／かたい／切れる／鋭い／足りない／働く／変になる／回る／やわらかい／弱い／悪い｝、頭の回転（が速い）、頭を｛切り替える／使う／悩ます／働かす／ほぐす｝、脳がない、{above / bother / go off / keep / lose / over / rack / trouble / use / worry} one's head / beat one's brain (out) / brainless / hard-headed / have a {good / bad} head / have a good brain / have a head on one's shoulders / have no brain / have one's head screwed on the right way / headless / out of head / soft-headed / use one's {brain / head}

次節では、表 1 における頭部表現のうち、理性・知性に関する表現を具体的に観察することで、生理的な身体経験に基づくメトニミーとは異なる形で動機づけられたと考えられる表現が、メタファーによる構造化のもとで成り立っていることを示す。また、「頭（脳）」と head (brain) のメタファーが、構造化のレベルでは部分的に相違することを指摘する。

4　理性・知性の座としての頭部の理解とその構造

4.1　＜容器＞としての頭部

まず、頭部が思考、記憶・理解の対象を収める＜容器＞として機能する概念メタファーを見ていく。本メタファーにおける対応関係は以下のようになる。

(11)　＜内容物＞—＜思考、記憶・理解の対象＞
　　＜容器＞　—＜頭部＞

従来の感情メタファー研究において、人体という容器へ収められた感情、特に怒りは、時間の経過とともに激しさを増し、理性の制御に抗い、表出行動として外に出されるというスクリプトを形成することが論じられてきた (e.g. Lakoff 1987)。このスクリプトの根幹をなすのは、内容物の量変化とそれに伴う容器内部の圧力の変化という、＜力＞ (FORCE) に関する知識である (Kövecses 2000)。一方、頭部のメタファー表現で利用されるのは、＜保存＞という我々が容器に関して持つもう一つの知識の側面である。(12-15) の通り、記憶に関する頭部の表現（特に head 表現）では、その行為に対する主体の意図性・能動性が強調されており、対象を取り込み (12)、保存し (13)、不要になったら取り除く (14, 15) という一連のスクリプトが形成されている（ただし、(16, 17) のように、内容物としての記憶が主体の意図とは無関係に留まることを表す表現も合わせて観察される）[7]。

(12)　＜取り込み＞
　a. 頭に｛入れる／置く｝
　b. {beat / get / knock} something into one's head / stuff someone's head with something / take it into one's head

(13)　＜保存＞
　a. （頭に｛入れておく／置いておく｝）
　b. keep something in the back of one's head

(14)　＜除去＞
　{get / put} something out of one's head

(15)　＜一掃＞
　clear one's head

(16)　＜付着＞
　頭に付く、脳裏に焼き付く

(17)　＜残存＞
　a. 頭に｛ある／残る｝
　b. have something hanging over one's head

また、(12-17) が前提とする＜容器＞は、我々が真っ先に想起するような容器（例えばコップ）からその他の種類の容器まで、様々な場合が考えられる[8]。(12a)「頭に置く」、(12b) {beat / knock} something into one's head

[7] (12a)「頭に置く」と (16)「頭に付く」について、友繁有輝氏から「これらの表現は「頭に入れる」と比べて記憶の定着度が弱いと考えられ、「頭に入れる」の前段階として位置付けられないだろうか」とのご指摘をいただいた。友繁氏のご指摘を踏まえてこれら 2 つの表現を比較してみると、記憶に対する話者の態度の観点から説明できるのではないかと思われる。「頭に置く」は将来の備えとして記憶に残すという意味が強いと考えられ、この場合即座にその記憶が必要とされる訳ではない。下でも挙げるが、「頭の片隅に置く」とも言うのは、その記憶の必要性が話者にとって不確かなものとして捉えられているためと考えられる。また、「頭に付く」は、通常、記憶として残すつもりのない事柄が留まることを表す。当初は表面的な印象に過ぎないが、それが「脳裏に焼き付く」ことで、思いがけない強い記憶として長く留まるのである。

[8] 認知意味論で言われる＜容器＞のスキーマとは、あくまで抽象的なイメージであり、「対象をその内部に留める」、「外部か

は、物を収納庫などの閉じた空間へ入れたり、押し込んだりする様子を基にした表現と考えられ、こうした空間としての頭部の認識は、(13b) keep something in the back of one's head や (17b) have something hanging over one's head の、通常小さな容器に対しては用いられないような語句の存在からも伺える（慣用表現としては得られなかったものの、日本語でも「頭の片隅に置く」と言う）。

同様に、(18, 19) の思考に関する表現についても、前提となる頭部の理解は一般的な容器からは外れると考えられる。特に (19)「{頭／脳みそ} を絞る」は、頭部を布などの繊維状のものとして捉えたと考えられ、そのイメージは典型的な容器とは大きく異なるが、「対象（液体）を留める」という性質を有するという点において、＜容器＞のスキーマの派生事例とみなす事ができるだろう。この表現は、苦心して新たな考えを得ることを意味するが、「絞る」の「含まれている液体を出す」という意味のみならず、絞るという行為が課す布への負荷がその比喩的な含意として継承されている。なお、類似の表現に beat one's brain (out) があるが、これは内容物としての brain が、容器としての head の外に叩き出されることを表す表現である。

(18) ＜白（空白）＞
頭の中が真っ白になる

(19) ＜絞り出し＞
{頭／脳みそ} を絞る (cf. beat one's brain out)

この他に、(20-22) のように考えを＜（生命体の）通過・侵入＞、＜（物体の）浮上＞、＜閃光＞へと喩えることで、予期しない発想を表す表現がある。英語の場合、into という語から判断するに head の容器性が保たれていると考えられるが、日本語の「過ぎる」では既に容器の閉鎖的な意味が除かれている。「過る」は対象がその場に止まらないことを意味として含むが、比喩的にも発想の一過性が継承されている点が興味深い。

(20) ＜通過・侵入＞
a. 頭を過る
b. {come / pop} into one's head / (never) enter one's head

(21) ＜浮上＞
頭に浮かぶ

(22) ＜閃光＞
{頭／脳裏} に閃く

さて、ここまでは特定の行為としての思考・記憶・理解に関する表現を見てきたが、(23, 24) は一般的な理性・知性が内容物と対応づけられた表現である。

(23) ＜質＞
{not right / wrong / weak} in the head

(24) ＜空・大きさ＞
a. 頭が空っぽ、頭でっかち[9]
b. empty-headed (cf. have a {big / swelled} head)

(12-15) の表現では、内容物の保存や出し入れに焦点が当てられていたが、対する (23, 24) では内容物の質や量が問題とされている。(23) は、容器としての頭が空であることやその大きさについて述べることで、内容物の不足・過多を表すメトニミー表現である。先述のように、大きく・膨張した状態の head は、知恵

らの力を遮断する」などの複数の性質を有するスキーマである。したがって、「容器」という語から連想されるコップや花瓶、鍋といった特定の物は、我々が＜容器＞のスキーマを形成するための経験を提供する一事物であって、それ自体が＜容器＞のスキーマと対応する訳ではない。Johnson (1987: 22) は、＜容器＞のスキーマについて以下の性質を挙げている。

(i) The experience of containment typically involves protection from, or resistance to, external forces.
(ii) Containment also limits and restricts forces within the container.
(iii) Because of this restraint of forces, the contained object gets a relative fixity of location.
(iv) This relative fixing of location within the container means that the contained object becomes either accessible or inaccessible to the view of some observer.
(v) We experience transitivity of containment.

[9] 「頭の大きさが胴体に勝っている」という意味で「頭勝ち（がち）」とも言う。

ではなく自惚れの気持ちを表し、(24b) との間に対応がみられない。一方、(24a) の日本語はいずれも知性と対応するが、特筆すべきは「頭が空っぽ」に加え、「頭でっかち」が他者について否定的に述べる場合に用いられる点である。「頭でっかち」は、「知識を述べるばかりで、実践的な行動が伴わない」という比喩的な意味に加え、「頭部がそれ以外の部位に対して不釣り合いに大きい」という意味を持つが、知性が宿る頭部、行動（実践）を担う身体との均衡性という観点から捉えることができよう。

以上、＜容器＞としての頭部に収められるのは、特定の思考・記憶・理解と一般的な理性・知性の両方であることをみた。前者のメタファー表現で利用されるのは、主に＜内容物の保存＞に関するスクリプトである。加えて、この種のメタファー表現では、＜容器＞のスキーマが収納庫のような閉鎖空間として精緻化されていると考えられるものが多い。また、＜内容物＞が一般的な理性・知性と対応した表現については、＜内容物＞の不足・過多の対応に関して日本語・英語で異なる非対称性がみられることを指摘した。

4.2 ＜具象物＞としての頭部

ここからは、＜具象物＞としての頭部の性質・所有（維持）・位置・働きなどを通じて理性・知性を表す表現を観察していく。(25) の通り、内容物としての思考、記憶・理解の対象を前提としない。

(25) ＜具象物＞—＜頭部＞
＜頭部＞ —＜理性・知性＞

分析に移る前に、本稿でいう「＜具象物＞としての＜頭部＞」が何を意味するのかについて定義しておく必要がある。端的に言えば、「＜具象物＞としての＜頭部＞」とは「物体という存在」としての頭部のことを指す。当然ながら、ヒトの身体は有形の一存在であり、その意味においては本定義はトートロジーに過ぎない。しかし、以下で扱う表現の中には、「身体という存在」から逸脱した頭部の理解が広く認められる。例として、「情報処理能力が優れている」ことを表す表現「頭の回転が早い」を取り挙げてみよう。この表現の成り立ちには、以下 2 つの比喩が関与していると考えられる。

(26) a. ＜頭＞を通じて＜知性＞を理解するメトニミー
b. ＜回転する物体（の回転の速さ）＞を通じて＜頭の思考能力＞を理解するメタファー

(26a) は、これまで繰り返し述べてきた最も一般的なレベルの対応関係、すなわち、知性の座としての頭部の理解が前提となっている。ここでは、頭という身体部位が、その中にある脳髄を通じ、その機能である知性を指すという形で、＜頭＞—＜脳＞—＜知性＞というメトニミー連鎖 (cf. Metonymy Chain: Dirven 2002) を為している。問題となるのは、(26b) の頭の思考能力を理解する上での比喩である。ヒトの実際の思考活動は、脳神経細胞（ニューロン）によって構成される神経回路内の電気信号の伝達によって実現されるのであって、その際、文字通り頭が「回転」している訳ではない。したがって、「頭の回転が早い」という表現には、回転する物体（例えば、機械のモーターや車輪など）が動く仕組みを通じて、直接観察することのできない頭（脳）の仕組みを捉えるメタファーが働いていることになる。このように、本稿では＜頭部＞が身体という存在のみならず、その本来の性質を逸脱した存在としても表現されうるという意味を込めて、「＜具象物＞としての＜頭部＞」と広く定義づける。

まずは特定の物体を想起しない最も中立的な表現を見てみよう[10]。

(27) ＜質＞
a. 頭が｛いい／おかしい／変になる／弱い／悪い｝
b. have a {good / bad} head / have a good brain
(28) ＜量（不足・欠如）＞
a. 頭が足りない、脳がない
b. headless / brainless / have no brain

(27, 28) は意味的に (23, 24) に相当するものである。(27a, 28a) のように、日本語では一般的に「頭（脳）」

[10] ただしこれらは、＜容器＞としての＜頭部＞が、その＜内容物＞としての＜理性・知性＞を指すメトニミーとしても分析できると考えられる。

を主語とし、形容詞的な語句を述部に置くのに対して、英語ではこのような形式が観察されない。(23, 24b) のような＜容器＞メタファーの形を取らない場合、英語では不足や欠如を表す接尾辞 -less あるいは、所有を表す動詞 have を用いて表すこととなる ((27b, 28b))。こうした特徴は、身体について言及する際に生じる日英語の一般的差異でもあり、(29a, b), (30a, b) のように比喩が関わらない表現についても当てはまる。

(29) a. 彼は髪が少ない。（髪が少ない人）
b. a hairless man
c. 彼は頭が足りない。（頭が足りない人）
d. a headless man

(30) a. 彼女は髪が長い。
b. She has long hair.
c. 彼女は頭がいい。
d. She has a good head.

さて、(30a, b) と (30c, d) における構文の形式には平行性が認められることから、一見すると head 表現における英語の have は、日本語における主題化 (Topicalization) の格助詞「は」とほぼ同等の機能を果たしており、have 本来の所有の意味はほとんど形骸化しているようにも思われる。しかし (31, 32) のように、英語では head が喪失 (lose) される場合があり、それゆえ head を喪失しないよう維持する (keep) 必要もでてくる。このことから判断するに、少なくとも理性に関する英語表現においては、head を所有物とみなす認識は今なおも残っていると考えられる。すなわち、head を持ち続けることによって、ヒトが本来持つ理性的精神状態が保証されるのである。一方の日本語では、「頭を失う」や「頭を保つ」によっては理性の喪失・維持を表すことができず、代わりに「おかしい」や「変になる」といった「異常」の意味を持つ語が用いられる ((27a))。

(31) ＜喪失＞
lose one's head

(32) ＜維持＞
keep one's head

また、英語は head を所有することのみならず、その位置を重視する言語であると考えられる。(33) は、head を本来の正しい形で固定し (screwed on the right way)、本来のあるべき部位に据えておく (on one's shoulders) ことを示した表現である。また (34) は、head の位置を基準に、主語で表される対象の head との位置関係を述べる表現である。(34) のうち、(34a) は人を主語に取ることで、主体が理性の座である head から離れ、理性を失うことを、(34b) は理解の対象を主語に取ることで、それが head よりも高い位置にあることにより、理解の及ばない様子を表す[11]。

(33) ＜位置＞
have one's head screwed on the right way / have a head on one's shoulders

(34) ＜乖離＞
a. go off one's head / out of head
b. {above / over} one's head

(27, 28) は、＜具象物＞としての「頭」や head の質や量について述べるものであったが、特定の物体が想起される訳ではなかった。これに対し、(35, 36) では＜具象物＞としての「頭」や head が＜固体＞へと精緻化されている。

(35) ＜固さ＞
a. 頭が｛かたい／やわらかい｝、頭をほぐす
b. hard-headed / soft-headed

(36) ＜鋭さ＞

[11] out of は＜容器＞を前提としているが、＜内容物＞が理性や知性ではなく主体であること、go off one's head と同様に head との位置関係（乖離）を問題としていることから、本小節での分析に含めた。

頭が｛切れる／鋭い｝

(35) は、「頭」や head が固さに関する語と結びついた表現である。日本語の「頭」は、その固さが「思考の融通性」を、鋭利であることが「思考力の優れている様子」を表す。「体が｛かたい／やわらかい｝」というように、日本語の「かたい」、「やわらかい」は、物質的な質感から、運動における柔軟性へと意味拡張を起こしている。また、「ほぐす」という語は、本来「結び目などの固定された状態が分かれて離れる」ことを表すが、「体をほぐす」のように、運動を前提とした柔軟性に対しても用いられる。同様に、「切れる」、「鋭い」の 2 語についても、運動上の俊敏性を表すことがある（e.g.「動きが｛切れる／鋭い｝」）。したがって、(35a, 36) の「頭」表現は、＜思考活動は頭部の物理的運動＞（＜思考力は頭部の物理的運動能力＞）という概念メタファーを基盤に、これら 2 つのメタファー＜運動の柔軟性は物質的な固さである＞＜運動の俊敏性は物質的な鋭さである＞が合成された表現と考えられる。一方、head 表現で用いられている soft については、運動的な意味への意味拡張がみられず、比喩的にも日本語とは異なる意味「思考力が劣っている様子」を表す（soft は「体のひ弱さ」を表すことがあるが（e.g. “I’ve been getting soft.”「体が弱くなってきた」）、こうした身体的な不完全さが head の機能である思考力と対応づけられたのではなかろうか）。hard についても同様で、hard-headed は「融通が利かない様子」を表すものの、「頭が固い」のように創造的な思考活動における機転というよりは、「意志を変えようとしない頑固者」という意味合いのようである[12]。「外から力を加えられても形が変わりにくい」という物質に対する hard の意味が、「他からの影響を受けつけない」という抽象的な意味へと対応づけられている点で、hard 本来の物質的質感に基づくメタファーとして分析可能である。

次に挙げるのが、「頭」や head (brain) を思考活動のための＜手段＞（cf. ＜道具＞: 有薗 2007）として理解する表現である。(31, 32) において、英語における理性的な head はそれを維持し続けることが重要であることをみた。一方の知性は、(37) のように手段として用いられることで初めてその意味を持つ。

(37) ＜手段＞
a. 頭を｛使う／働かす｝
b. use one’s {brain / head}

日本語において特徴的なのは、「頭」が常に「使われる」のではなく、一旦使われると、継続的に作動する物体とみなす表現が多いことである。(35a, 36) に対する分析において、「かたい」、「やわらかい」、「鋭い」、「切れる」という語が運動的な意味を表すことを指摘したが、その動的な性質は、(38) の表現においても伺える。(38) の表現は、その各々から必ずしも特定の物体に絞り込まれる訳ではないものの、＜機械を働かせる＞→＜機械が働く＞→＜機械（のモーター）が回る＞→＜機械（の動きが）が遅れる＞→＜機械を切り替える＞→＜機械（のモーター）の回転が早い＞などの形で、互いに関連づけられることを考慮すると、「頭」における思考活動が、機械のような自律的な物体が作動する様子に喩えられているとみなすことができるだろう。

(38) ＜機械の作動＞（＜自律的な物体の運動＞）[13]
頭が｛遅れる／働く／回る｝、頭の回転（が速い）、頭を切り替える

以上、＜具象物＞としての頭部の理解について述べたことをまとめる。まず、英語において特徴的なのは、head の所有（維持）と位置である。このうち、理性に関する表現では、主体が head を喪失・維持するこ

[12] *OED* には、”1b. Of a person, or a person's character or behaviour: stubborn, uncompromising, intractable. Also of a fact, opinion, etc.: irrefutable, unyielding.” とある（“hard-headed, *adj*.” *The Oxford English Dictionary*. 3rd ed. (2013) *OED Online*. Oxford University Press. 15 March 2018 <http://dictionary.oed.com/>)。なお、“1a. Of a horse or other animal: obstinately disobedient; uncooperative, recalcitrant.” ともあり、動物に対しても用いられるようで、初出の用例としてはこちらの方がわずかばかり古い。hard-headed が動物由来のメタファーである可能性についても、今後の調査課題としたい。なお今回、その意味と成立の由来から分析対象に含めなかった表現に、have one’s head in the sand （「見て見ぬ振りをする、知らないそぶりをみせる」）があるが、この表現はダチョウが危険を感じると頭だけ砂の中に隠し、助かった気になるという言い伝えに基づく表現である（『英和イディオム完全対訳辞典』）。

[13] 今回用いた出典元からは得られなかったが、Dirven (2002) では、“Their brains work about half as fast as ours.” という英語表現が挙げられている。今後は慣用表現に限らず、広く用例を収集していく必要がある。

とや、主体自身が head から離れていくなどの事象が述べられる。一方、知性が表される場合、所有される head (brain) がどのような性質を持つのか、またそれが適切な形で、正しい位置に置かれているのかが言及される。一方の日本語では、「頭（脳）」の所有（維持）・位置を述べることはなく、むしろ実践的な思考活動を担う頭部の機能が注目される。こうした特徴を支えているのは、頭部を動的・自律的な物体として捉えた (35a, 36, 38) のような表現である。このように、日英語の頭部は理性・知性と結びつくが、その際立ちや、それを支えるメタファーには差異がみられる。

さて、ここで改めて「頭」と head の理性との結びつきについて考えてみたい。Lakoff and Johnson (1999: Ch. 13) は、英語話者が自らの内面的な生活 (inner life) を理解する手立てとして、＜主体＞ (SUBJERCT) と＜自己＞ (SELF) を切り分けて捉えるメタファー (Subject-Self Metaphor) を利用していることを論じている。彼らが下位メタファーとして挙げる 5 つのメタファーの中に、自己の制御を物体の制御に喩えたメタファー (Physical-Object Self Metaphor, e.g. “I lost myself.”) と、自己の制御を己が本来居るべき場所に止まることに喩えたメタファー (Locational Self Metaphor, e.g. “I was out of myself.”) があるが、(31, 32) と (34a) の表現は、正にこれらのメタファーと整合するものである。このように、英語では、理性的な head こそが主体にとっての本来の自己 (myself) とみなされている。これを踏まえ、日本語を見直してみると、理性（の喪失）に関する表現「頭が｛おかしい／変になる｝」では、いずれも「頭」と結びつく語自体に「異常」の意味が含まれている。またこれらは、英語の lose one’s head が表すような「一時的に感情に走る」様子を表すというよりは、いずれも「狂気 (madness)」としての意味が強い。Lakoff and Johnson (1999) は、日本語にも＜主体＞—＜自己＞メタファーが存在するとして、「我（われ）」という語を用いた表現例を挙げているが、(39, 40) のように、「我」表現と「頭」表現との間に英語の oneself と head のような互換性が認められないことを考えると、日本に理性の概念が存在するにしても、「感情に対する理性の座」、「理性的な自己の座」としての「頭」の認識は英語の head ほど強くはないと考えられる。日本語の「頭が｛おかしい／変になる｝」は、もっぱら「思考活動（知性）の座」としての頭部の理解を前提に、それが異常を示すことで正常な思考活動が妨げられるという意味から派生しているのではないだろうか。

(39) Physical-Object Self Metaphor
　a. 彼は怒りのあまり我を忘れた。　(Lakoff and Johnson 1999: 285)
　b.*彼は怒りのあまり頭を忘れた。

(40) Locational Self Metaphor
　a. 彼はようやく我に返った。　(Lakoff and Johnson 1999: 286)
　b.*彼はようやく頭に返った。

5　まとめと今後の展望：理性・知性の座としての頭部の理解とその成立背景

本稿では、認知言語学的な観点から、「頭（脳）」表現、head (brain) 表現を比較検討した。日英語の頭部は、いずれも非感情的な精神作用（理性・知性）の座として理解されているが（第 2 節）、各々の表現の成り立ち見た場合、こうした類似性を身体経験（生理的な感覚・運動との共起経験）に強く求めることはできない（第 3 節）。そこで第 4 節では、身体経験では説明し難い「頭（脳）」表現、head (brain) 表現をより詳しく観察することで、理性・知性に関するそれらの表現がメタファーの支えによって成立していることを示した。また、日英語の頭部は理性・知性と結びつく一方で、その際立ちや、それを支えるメタファーには差異がみられることを論じた。

未解決の課題として残るのは、頭部と理性・知性との対応を根本的に動機付ける要因を、身体経験以外の何に求めるかという問題である。Niemeier (2008) によれば、head が理性・知性の座であるという認識が本格的に浸透し始めたのは、デカルト的二元論思想・解剖学が根付き始めた 17 世紀半ばであり、現代英語に今なおも残る理性・知性の座としての head の意味はこうした時代の影響に因るところが大きい[14]。一方の日本語に関しては、一般に頭部と理性・知性を結びつける見方が定着した時期がいつであるのかを明確に特定することは難しく、現時点では、次のように当時の頭部に関する語の用法から推測するに止まる。

[14] ただし、西洋文化圏において、精神の座を頭部に求める見方はすでに古代ギリシャのヒポクラテス、プラトン等にもみられる (Erickson 1997)。また、*OED* における精神的な意味としての head の用例は、最も古いもので古英語期からの出典である。

宮地 (1973) の記録によれば、頭部に関する日本語の身体語彙は、複数の語が消長・交替を繰り返した痕跡がみられ、室町のある時期までは、現代日本語においてごく限られた文脈でのみ生起する「かうべ」、「かしら」が主に用いられていた。ただし、その記述を見る限り前者は身体部位としての意味から外れることなく、後者についても、頭内部の感覚（頭痛）を指すことがあっても、本稿でいう理性・知性の意味を得るには至らなかったようである。一方の「あたま」は、1000 年以上前から存在したと考えられるが、元は顳門（ひよめき）を指す語として用いられ、その後勢力を拡大するとともに頭部全体へと指示範囲を広げていった。精神的な意味用法として挙げられている「あたま」の例は、安土・桃山期の作品からである[15]。このことから推測するに、頭部が初めから精神の座としての認識を得ていたわけではなく、また、比較的早い時期から感情への使用がみられる「胸」と比べると（e.g.「むねの焦がるることは、いふ限りにもあらず」（蜻蛉日記））、「頭」が理性・知性に関する意味を獲得するには時間を要したようである。日本語の「頭」の比喩的な意味変化の背景に、どのような歴史的影響があったのかについては現時点では調査が及んでいないものの、英語のheadと同様に、身体経験とは異なる要因の存在を考慮していく必要がある。合わせて、今後は古辞書にも当たることで、「頭」の意味変化の歴史的調査を進めていく予定である。

5. 参考文献

安藤貞雄 (1986)『日本語の論理・英語の原理－対照言語学的研究－』大修館書店, 東京.

有薗智美 (2007)「「頭」「胸」「腹」－精神活動の在り処としての身体部位詞－」,『日本認知言語学会論文集』第 7 巻, 310-320, 日本認知言語学会.

有薗智美 (2009)『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.

Dirven, René (2002) “Metonymy and Metaphor: Different Mental Strategies of Conceptualisation,” *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*, ed. by René Dirven and Ralf Pörings, 75-111, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

穎原退蔵 (著)・尾形仂 (編) (2008)『江戸時代語辞典』角川学芸出版, 東京.

Erickson, Robert A. (1997) *The Language of the Heart 1600-1750*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

後藤秀貴 (2018)「日英語の胸部と腹部の理解をめぐって－比喩的認知を生む身体経験、社会・文化経験の観点から－」, *JELS 35,* 21-28, 日本英語学会.

姫田慎也 (2003)「身体表現に関する日英語比較研究」,『龍谷大学国際センター研究年報』第 12 巻, 73-87, 龍谷大学, 京都.

Hornby, Albert S. (2005) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 7th ed., Oxford University Press, Oxford.

稲葉茂雄・William. I. Eliott・西原克政 (著) (2009)『トーキング・ボディー英語からだ表現辞典－』港の人, 鎌倉.

Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*, University of Chicago Press, Chicago.

金田一京助・大石初太郎・佐伯梅友・野村雅昭 (編) (2001)『新選国語辞典（第 8 版ワイド版）』小学館, 東京.

小林祐子 (編著) (2008)『しぐさの英語表現辞典（新装版）』研究社, 東京.

Kövecses, Zoltán (2000) *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feling.* Cambridge University Press, Cambridge.

Kövecses, Zoltán (2005) *Metaphor in Culture: Universality and Variation*, Cambridge University Press, New York.

[15]『天草伊曽保物語』（1593 年）からの出典（「Atamani（アタマニ）チエガ　アルナラバ」）である。なお、『日本国語大辞典（第 2 版）』、『時代別国語大辞典（室町時代編一）』の例も同一箇所からの出典である。執筆上の都合で同じ用例が引かれた可能性は否めないが、やはり当時は「頭」の精神的な意味での使用が限られていたのではないだろうか。事実、『角川古語大辞典』（上代から近世末までに用いられた語彙を採録）、『江戸語大辞典』、『江戸時代語辞典』を引くと、これらの文献においては「あたま」の項目において精神的な意味への言及はみられない。もう一点述べるとすれば、出典元の『天草伊曽保物語』が他言語由来のテキストであることから、この用法が当時の日本語として確実に定着していたのかは定かではない。

楠見孝・米田英詞 (2007)「感情と言語」, 藤田和生 (編)『感情科学の展望』, 55-84, 京都大学学術出版会, 京都.

Lakoff, George (1987) *Woman, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980/2003) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago.

Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books, New York.

前田勇 (編) (1974)『江戸語大辞典』講談社, 東京.

Matsuki, Keiko (1995) "Metaphors of Anger in Japanese," *Language and the Cognitive Construal of the World*, ed. by John R. Taylor and R. MacLaury, 137-151, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

松井真人 (2007)「メタファーの経験的基盤に関する一考察－「心」の存在場所に関する日英語のメタファーをめぐって－」, 『山形県立米沢女子短期大学起用論文』第 42 巻, 37-44, 山形県立米沢女子短期大学, 米沢.

松村明 (編) (2006)『大辞林（第 3 版）』三省堂, 東京.

McCaleb, John G.・岩垣守彦 (編著) (2003)『英和イディオム完全対訳辞典』朝日出版社, 東京.

皆島博 (2006)「日英語の身体部位語彙－「アタマ」と "head" －」,『福井大学教育地域科学部紀要』第 91 巻, 49-62, 福井大学, 福井.

宮地敦子 (1973)「身体語彙の変化－「かうべ」「かしら」「あたま」「なづき」など－」, 『国語学』第 94 巻, 1-15, 日本語学会.

室町時代語辞典編集委員会 (編) (1985)『時代別国語大辞典（室町時代編一）』三省堂, 東京.

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義 (編) (1982)『角川古語大辞典』角川書店, 東京.

Niemeier, Susanne (2008) "To Be in Control: Kind-Hearted and Cool-Headed. The Head-Heart Dichotomy in English," Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages, ed. by Farzad Shiarifian et al., 349-372, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2000/2001)『日本国語大辞典（第 2 版）』第 1 巻・第 10 巻・第 12 巻, 小学館, 東京.

Sharifian, Farzad, René Dirven, Ning Yu, and Susanne Niemeier (2008) "Culture and Language: Looking for the 'Mind' inside the Body." *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages*, ed. by F. Sharifian et al. , 3–23, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

新村出 (編) (2008)『広辞苑（第 6 版）』岩波書店, 東京.

小学館辞典編集部 (1994)『使い方の分かる類語例解辞典』小学館, 東京.

田中聰子 (2003)「心としての身体－慣用表現から見た頭・腹・胸－」, 『名古屋大学言語文化論集』第 24 巻 2 号, 111-124, 名古屋大学, 名古屋.

東郷吉男 (編) (2003)『からだことば辞典』東京堂出版, 東京.

梅棹忠夫・阪倉篤義・金田一春彦・日野原重明 (監修) (1989)『講談社カラー版日本語大辞典（初版）』講談社, 東京.

渡邉敏郎・Edmund R. Skrzypczak・Paul Snowden (編) (2003/2008)『新和英大辞典（電子増補版）』. 研究社, 東京.

【付録】

本稿では、もっぱら頭部の内的な精神作用に関わる表現を扱ったが、日本語の「頭」と英語の head には、もう一つの大きな意味カテゴリーである「しぐさ」が結び付けられる。以下、小林 (2008) を参考に付録として挙げておく。

頭部に関するしぐさは、[1] 頭部の上下・前後の位置に関するもの (41)、[2] 左右・斜めへの移動動作に関するもの (42)、[3] 手を使った動作に関するもの (43) へと分類できる。日本語・英語ともに、[1] から [3] のしぐさ全てに該当表現が見られるが、その意味としては隔たりがあり、各々の言語の発想からは推測できない部分が多い。

[1] 上下・前後への移動動作

日本語の場合、「頭」の垂直的な位置関係は、互いの社会的な立場関係が明確である場合のみならず、純粋に相手への敬意の象徴としても参照されるが、一方の英語では、低い位置が失望・後悔・恥辱・敗北などを、高い位置が毅然とした態度・自信の表れ・満足などの様々な状況を表す。日本語では、「頭」を低く保つことが世渡りの手段として求められるのに対し、英語ではむしろマイナスの意味合いを持つ(小林 2008: 458)。日本語でも、英語のようなしぐさが存在しない訳ではないが、「頭」ではなく、その他の部位を以て表すことが多いと考えられる（e.g.「肩を落とす」、「項垂れる」、「顔を上げる」、「胸を張る」)。

(41) a. 頭が｛下がる／低い｝、頭を｛下げる／垂れる／低くする｝
b. 頭が｛上がる（上がらない）／高い｝
c. {bow / bend / drop / hang / lower} one's head / one's head {droops / sags} / one's head sinks to his chest
d. {hold / pick} one's head {high / up} / Heads up!
e. put one's head back / toss one's head / thrust one's head forward

[2] 左右・斜めへの移動動作

頭を斜めに傾けることが考え込む様子を表すのは、日英語共通のようである。ただし、日本語の場合、相手への疑問・不審を示す場合にも用いられるのに対し、英語では、むしろ相手の話を注意深く聞くしぐさとして用いられる。この場合も、日本語では異なる身体部位が参照される（e.g.「耳を傾ける」)。

(42) a. 頭を｛傾ける／振る｝
b. shake one's head / put one's head on the side

[3] 手を使ったしぐさ

困り果てた際に頭を手で支えるしぐさは日英語共通のようである。一方、頭を掻く動作をみると、日本語では、恥隠し、照れ隠しのしぐさとして用いられるのに対し、英語の scratch / rub は、どうしようもなく当惑した場合に無意識的に起こるしぐさとして用いられる。

(43) a. 頭を｛抱える／掻く｝
b. {clutch / hold / slap / scratch} one's head / rub the {back / side} of one's head